

6) オウレン=黄連

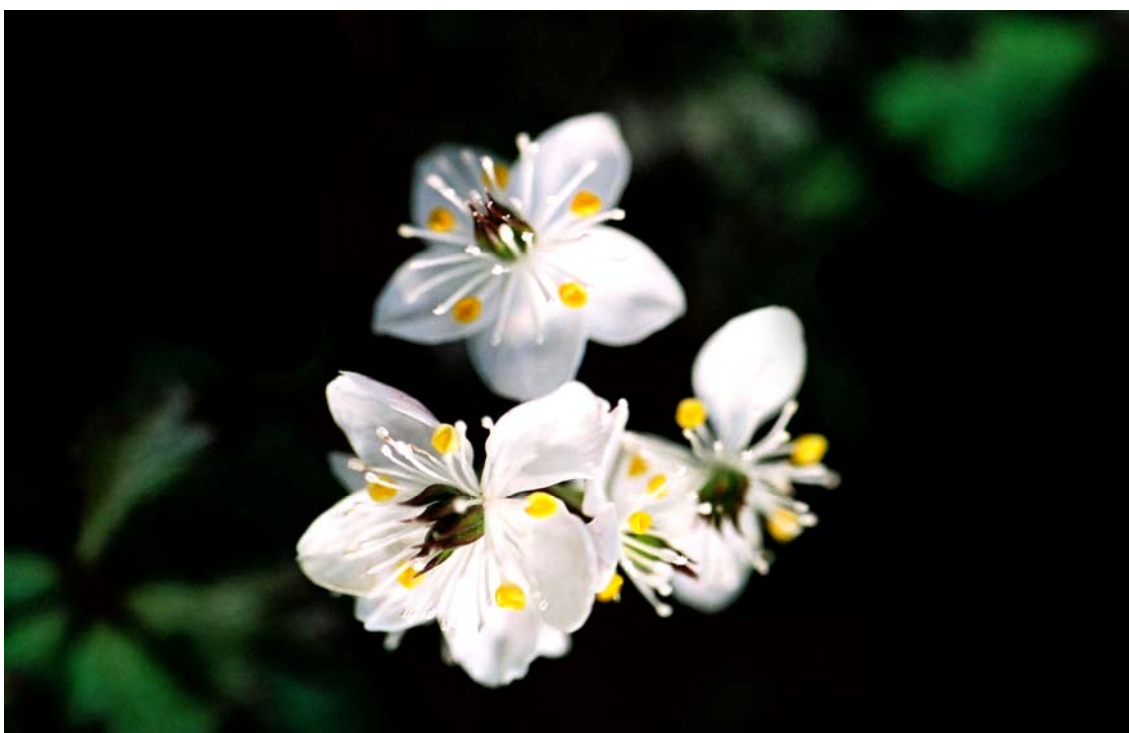
オウレンはキンポウゲ科の常緑多年草である。北海道、本州、四国の山地の緑陰に自生し、薬用として昔から栽培されている。花は草本では珍しく雌雄異花で早春15cmほどの茎を伸ばし、花径2cmほどの白色の花を互生してつける。しかし花弁に見えているのは萼片で、黄色で5枚の花弁は退化し、雄蕊のあいだに、わずかに顔をのぞかせるのみである。雄花の花芯は開花するとやや黄緑色を帯びるものの、雌花の花芯は茶褐色となる。根茎は黄色でやや太い多肉質、多数の鬚根があり、根茎にはベルベリン系のアルカロイドを含んでいる。葉は茎の根元から根生し、長さは10~25cmの複葉で、小葉には鋭い鋸歯がある。また複葉の分裂の仕方には3つのパターンがあって、主に日本海側に分布するキクバオウレン、本州の中部山地に分布するセリバオウレン、太平洋岸にはコセリバオウレンがある。和名の由来は根茎の断面などが鮮黄色であるためで、別称はクスリグサとかナギナタホウズキ、古くはカクマグサなどとも呼ばれていたらしい。学名は『*Coptis japonica*』、属名は切るという意味で、葉が分裂していることによるものである。中国では『黄連』であるが、これは誤用とされている。

オウレンは昔から薬用として、また黄色の染料をとるためにも広く栽培されてきた。栽培種はキクバオウレンとセリバオウレンで、主に福井県、兵庫県、鳥取県で栽培されていたため、それぞれの地名を冠して、加賀黄連、丹波黄連、因幡黄連と呼んでいる。特に京都北西部から兵庫東部の日本海側で栽培される丹波黄連は有名である。どのエリアもいわば積雪地帯で、オウレンは冬の間は雪の下で寒さを凌いでいるわけで、この間に良質なベルベリンを蓄積する仕組みになっているものと思われる。雪の下は春までほとんど温度変化はなく、ずっと0℃の状態である。この0℃は不思議な温度で、植物は体内に糖분을蓄え、動物はアミノ酸(03-06-00 参照)を蓄える(04-02-09 キンカンの項参照)。根茎を乾燥させたものを漢方では『黄連』と呼び、ベルベリン系のアルカロイド(05-02-00 参照)のために、強い苦みがある。しかしこのアルカロイドには抗菌作用と、抗炎症作用等があるために、他の生薬と混ぜて、消炎性の苦み健胃、鎮静薬として、顔面や頭部などの鎮痛に用いる他、清熱、止瀉、不眠、口内炎、出血、下痢、赤痢、眼病、化膿性皮膚炎などにも用いられた。『黄連湯』『黄連解毒湯』『三黄丸』『三黄止瀉心湯』などと呼ばれているものが、その漢方剤名で、漢方の専門店ではどれもよく利用されている。

しかしオウレンは漢方や染料としての効能もさることながら、観賞用として植えられることもしばしばで、特に花の美しいバイカオウレンは野草ファンには収集アイテムの一つになっている。繁殖は株分けか播種で、播種の場合は花が咲くまで5年ぐらい辛抱しなくてはならない。また直射日光を嫌うので、夏は特に寒冷紗などでの日光の調整が必要である。肥沃地よりもむしろ荒地を好む。



バイカオウレンの雄花、この花は珍しく花弁が6枚ある。白い花弁に見えるのは萼片で、花弁は内側にある小さな黄色の円形状で5枚見えている(東京都小平市薬用植物園)。



バイカオウレンの雌花、雄花とは花芯が異なっている(小平市薬用植物園)。バイカオウレンは葉をつけたまま枯れることなく越冬し、春、真っ先に落ち葉の間に花を咲かせる。この季節に咲いている花といえば、ユキワリソウ、フクジュソウ、クロッカスぐらいである。



セリバオウレンの種子、根茎にベルベリンを多く含んでいる(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)